

和歌・俳句を用いた思考力の育成

―芭蕉の発句・額田王の歌を例として―

松田 聡

一、はじめに

中学・高校の生徒にとって、古文を原文で読みこなすことは容易ではない。その高いハードルを乗り越えるために中学校の教科書には原則として「現代語訳」が付けられているが、高校の教科書になると「現代語訳」はほとんど姿を消し、生徒は「原文」による読解という課題といきなり向き合うことになる。高校進学时に古文学習の難易度が急に上がるという印象は否めないだろう。この中高のギャップを少しでも埋めることはできないものだろうか。

そのような視点から、本稿では和歌や俳句などの韻文教材に着目したい。韻文は「現代語訳」だけでは味読が難しく、「原文」に目を向けさせる教材として適していると考えられるからである。また、韻文教材にはそのほかにも以下のような利点がある。

・中学校三年「国語」と高等学校一年「言語文化」の全

ての教科書で教材化されており、中高の連携を考えるのに適している。

・短詩型であることから「現代語訳」と「原文」の対照が比較的容易である。諸説の比較もしやすい。

特に後者は本稿の重視するところである。以下、教科書における「現代語訳」のありようを概観しつつ、思考力の育成という観点から韻文教材について考察してみたい。

二、中学校教科書の「現代語訳」

現行の中学校国語教科書は四社から出版されているが（東京書籍・三省堂・教育出版・光村図書、令和二年二月検定、国語501〜4）、前述のごとくこれらに採録される古文教材には原則として「現代語訳」が付けられている。その形式については、「現代語訳」を本文の下段など別の場所に掲載するもの（別提型）と、本文の左横に部分訳を付すもの（傍注型）が大半を占め、作品によって適宜使い分

けられている。和歌など一部の教材には脚注に部分訳を載せる場合もある（脚注型）。

別提型は訳文をまとめて読むことができるという利点があるが、原文と訳を対照させるには時間がかかるというデメリットもある。逆に傍注型は原文との対照は容易であるが、部分訳になっていることが多く、訳だけを先に読むには不向きである。脚注型は原文から脚注へ目を移しつつ自分で全体を把握することが求められる。これらは、生徒の学習段階や指導目標、あるいは文章の難易度によって適宜使い分けるといえることが想定されているのであろう。²⁾

ここで注目したいのは、中学校教科書にも「現代語訳」のない教材があるということである。各社とも中学三年の教材として『おくのほそ道』から「冒頭」と「平泉」の一節を採録しているが、このうち「平泉」はいずれも脚注のみで「現代語訳」を掲載していない（三省堂と教育出版はこのほか「立石寺」も原文のみ掲載する）。これについて、例えば光村図書の『中学校国語学習指導書3下』（二〇二一・二）には、「平泉」の「教材提出の意図」として次のようにある。

平泉の場面では、脚注のみで訳文を付けていない。それは、この部分が、一読して概要をつかめる簡潔な文章だからであり、冒頭部分で原文に読み慣れた後であれば、脚注を頼りにして読むことができると判断した

からである。「おくのほそ道」のいちばんの魅力は、その格調高い文体にあり、朗読によって、その味わいを実感することから学習を始めた。 (一三二頁)

確かに「平泉」は、故事や典故、地形、地名等の注があれば内容はある程度把握できる。発句（俳句）を含むこの一節は、正に「原文」を味わうところに意味があると言ふべきものであろう。より「原文」を重視するという次の段階にステップアップするために、あえて「現代語訳」を掲載していないのだと理解される。

ここにはいかに「原文」に目を向けさせるかという問題が見え隠れしている。以下、『おくのほそ道』の発句に焦点を絞り、具体的にその問題を考察してみよう。

三、松尾芭蕉「草の戸も」の句をめぐって

本節では、『おくのほそ道』冒頭部の「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」を取り上げる。この句は中学三年「国語」の全ての教科書と、高校「言語文化」の大半の教科書（十七種のうち十四種）に採録されているが、「現代語訳」を付けているのは中学校教科書の次の二社のみである。

a このような草庵そうあんにも、あるじの住み替わる時節がやってきたことだ。私のような世捨て人の住んでいたときとは違い、雛人形ひななまも飾られて華やかになることである。

（東京書籍『新しい国語3』国語001）

b元の草庵にも、新しい住人が越してきて、私の住んでいた頃のわびしさとはうって変わり、華やかに雛人形などを飾っている。(光村図書『国語3』国語60A)

どちらも「現代語訳」のみで注はない。なお、他の二社(三省堂・教育出版)は「現代語訳」を掲載せず、教育出版は注さえ付けていない。三省堂は「ひなの家」に「妻も娘もおり、ひな人形を飾る家。今までのわびしい『草の戸』の家に対比して『ひなの家』といった」と注を付けている。教科書によってかなり判断が分かれていると言えよう。

まず前掲のa・bを比較すると、aが原文の語順に比較的忠実なのに対し、bには「住み替わる代ぞ」の「ぞ」(切れ字)に相当する文の切れ目がなく、「現代語訳」というよりは説明に近くなっている。ちなみにbの教師用指導書(光村図書『中学校国語学習指導書3下』)を見ると、「指導上の留意点」には「現代語訳と対照したり、脚注を参考にしたりしながら、文章の内容をまとめさせる」(一四九頁)とあるが、この句については「現代語訳」とどう対照させるか、特に指示はない。

もちろん、この句の場合、「草の戸」と「雛の家」という「対比」が鍵を握っていることは言うまでもない。すなわち、「草の戸」(草庵、粗末な家、隠者の家、「住み替はる」(転居によって住人が入れ替わる)、「雛の家」(華やかな家、雛人形を飾るような家族が住む家)という、それぞれ

れの言葉が放つイメージを読み取って、「住み替はる」ことによって生じる住居のイメージの変化に気づくということが求められているわけである。

しかし、「現代語訳」のない教科書の場合、「雛の家」について生徒が独力で解釈することは想像以上に困難であると思われる。「雛の家」が右のような解釈に落ち着いたのは主に戦後の研究によるものであって、決して自明のことではないからである。例えば優れた古注として知られる養ひつぎ庵あん梨り一いち『奥細道菅菰抄』(1778)には次のようである。

頃は二月末にて、上巳じょうしのせち(三月三日の節句のこと・引用者注)に近き故に、雛を商ふもの、翁おきなの明庵めいあんをかりて売物うりものを入、置所おきところとなせしによりて、此吟ありと云。つまり、雛人形の商人が芭蕉庵を売物の置き所(物置)にしていたという解釈である。現在この説はほぼ否定されているが、それは別の文献(『世中百韻』)に、

はるけきたびの空おもひやるにも、いさ、かもこ、ろにさはらん、ものむつかしければ、日比住ひひすみける庵いほりを相しれる人にゆづりていでぬ。このひとなむ、つまをぐし、むすめ、まごなどもてるひとなりければ

草の戸も住かはる世や雛の家

とあり(傍線引用者)、また、この句を記した芭蕉真蹟短冊ざくの前書きにも「むすめ持たる人に草庵をゆづりて」とあ

るからである。⁶娘や孫のいる人に庵を譲ったという現在の通説はこれらの資料⁷によって裏付けられたものであり、かつては複数の異説が存在していたのである。⁸

現代語訳の付いていない教科書の場合、この点に配慮すべきことは言うまでもない。「雛の家」に対する現在の通説を自明のものとし、それを生徒から引き出そうとしても、うまくいかないケースが十分考えられるからである。もし解釈を生徒自身に考えさせるのであれば、必要な情報を選択し、必要に応じて上手に提供する必要があると思われる。

但し、現在の通説を支えているのが、あくまで『おくのほそ道』というテキストの外にある、別資料の情報であるということには注意しておきたい。『おくのほそ道』本文には「住める方は人に譲り(て)」としかなく、どのような「人」に譲ったかは読者の想像に委ねられているのであるから、別資料によってあまり解釈の幅を狭め過ぎるのも問題であろう。この句の成立に関する議論と紀行本文の読みは区別すべきであり、本稿としては紀行本文の許容する範囲で生徒にはもう少し自由に考えさせてよいと考える。

ところで、よく見ると前掲 a・b の「現代語訳」には内容的に大きな違いがある(以下一部再掲・傍点引用者)。

- a 雛人形も飾られて華やかになることであろう。
- b 華やかに雛人形などを飾っている。

「雛人形」は新しい住人によってこれから飾られるのか

(a)、それとも既に飾られているのか(b)という点で解釈が対立している。実はこの点については現在の研究者の間でも説が分かれているのであるが、その対立が教科書に持ちこまれてきているのは、それぞれが立場の異なる注釈書に依拠して作られているからである。⁹

a 説によれば、芭蕉(厳密には作中主体の「予」)は転居後の情景を想像してこの句を作り、退去の際に芭蕉庵の「柱」に「表八句」(この句を発句とする百韻連句の初表)を懸け置いたということになるが(想像説)、b 説によれば、「杉風が別墅」(≡採茶庵)に移った後、旧居に新しい住人が住んでいる情景を目にして、その感慨を吟じたということになる(眼前説)。どちらの説を採るかによって、作品の印象は大きく異なると言うべきであろう。

a・b のどちらが正しいかを問うことは本稿の目的ではないが、あえて私見を示せば、本稿は a 説に与するものである。『おくのほそ道』におけるこの句の前文に「杉風が別墅に移るに」とあり、これは「杉風の別宅に移る時に」といった意味であるから、芭蕉庵を去るまさにその時の感慨と見るのが穏やかであろう。但し、芭蕉の落梧宛書簡に見えるこの句(恐らく初案)の前書に「草庵のかはれるやうおかしくて」とあることからすれば、尾形竹氏(もと)の言うように「当初の芭蕉のモチーフの中心」は「人に譲った草庵を後から覗いてみた」時の感慨かもしれない(『おくのほ

そ道評釈〔2001〕。しかし、それはあくまで当初の作意であつて、尾形氏も注意するように当初の作意と『おくのほそ道』本文の読みとは区別して理解すべきであろう。富山奏氏は「前書として付記する制作事情が事実と相違する場合には、事実よりも前書に言うところに即して句を解釈すべきである」として「想像説」（a説）を支持しているが、本稿もその理解に賛同したい。

もちろん、教科書の依拠する有力な注釈書でさえ意見が分かれているという現状を考えれば、授業の中で必ずしも「正解」を一つに決める必要はないと思われる。たとえ「正解」が決まらなくても、「現代語訳」を比較し、議論すること自体に次のような意味があるからである。

- ① 比較によって批判的な視点を獲得し、解釈の核心に迫るような深い思考をめぐらせることができる。
- ② 古典の「現代語訳」には解釈の分かれるものがあるということを認識できる。
- ③ 一つの作品に多くの人が関わってきたという享受の歴史に気づくことができる。

そのような教材が中学三年の教科書に配されていることは誠に意味のあることと言わねばならない。俳句や芭蕉の紀行文は、助詞・助動詞や敬語等の用法を熟知していなくても何とか大意を取れるという利点があり、また、前掲の学習指導書が言うように、味読するに値するような「格調

高い文体」であることも原文をそのまま扱うのにふさわしい。更には、これほど有名な句でありながら、今なお解釈が分かれているということも、教材としての豊かな可能性を示すものではないだろうか。右に掲げたように、諸説を検討するというプロセスは思考力の育成に資する(①)だけでなく、生徒がこの句の注釈史に享受史に思いを致す(③)ということにつながるからである。

これについては、島内景二氏の次の言説が示唆的である。『増註湖月抄』(源氏物語の注釈書・引用者注)を読む副産物は、本文に加えて諸注釈書の対立する見解を知るので、それぞれの説の根拠を考える時間が必要となることである。すなわち、時間がかかる。そうすると、時間をかけて諸説を比較検討しているうちに、行間に込められた登場人物の息づかいや心の中が、我がことのように感じられた。これは、本文だけを読んでいたり、現代語訳で速読したりしては、絶対に感じ取れない「読み方」だった。注釈で古典を読む醍醐味は、ここにあった。文章の背後から、時代を超えた先人たちの解釈が聞こえてきて、その彼方に、登場人物や作者の心が見えてくるのだ。(傍線引用者)

「古い作品」は長年にわたり人々に磨かれ続けて「古典」になっていくものであるが、注釈の歴史は、そのプロセスの一端を垣間見せているという次第なのである。

四、教科書の和歌単元

このように、韻文教材の読解を通して「原文」と「現代語訳」の関係を自覚的に捉えることにつながれば、それは生徒が独力で「原文」に向き合うための一つのステップとなりうるのではないだろうか。

その観点よりすれば、同じ中学三年の教科書に各社とも和歌単元（万葉集・古今和歌集・新古今和歌集）を設けているということは見逃すことができない。中学校教科書において和歌単元の全ての歌に「現代語訳」を付しているのは光村図書だけであり（別提型）、他三社は、一部に鑑賞文を付すものはあるが、原則として原文と脚注のみを掲載している。和歌こそは、韻律や種々の技法など、現代語訳に置き換えがたい要素を多く内包しているからである。これら三社の教科書では脚注を頼りに学習者自身が自力で解釈するということが求められているわけである。

では、次の高校一年の教科書はどうなっているのだろうか。必修科目「言語文化」の場合、多くは導入教材（「見のそら寝」などの散文）に傍注型の「現代語訳」を付すのみで、他のほとんどの教材は、和歌・俳句を含めて原文と脚注のみという形式を取っている。

その中であって、数研出版『新編言語文化』（言文(8)）の次の試みは注目に値しよう。同教科書はまず「和歌が作

り出す世界」という単元で『新古今和歌集』の教材の一つとして次の歌を掲げる（二一八頁、歌番号は引用者）。

百首歌の中に、忍ぶ恋を

式子内親王

玉の緒よ絶えなば絶えねながらへば忍ぶることの弱りもぞする（恋歌一・一〇三四）

この歌をまず原文と脚注のみで読ませ、その上で、この単元の最後に「和歌を訳す」（探究の扉―比べ読み―）というページを設けて（二二〇～二二二頁）、以下の三つの「現代語訳」を比較させるといふ課題を掲げている（「／」は改行、a～cの符号は引用者による）。

a 玉を貫く緒よ わが、いのちの流れよ／切れるのなら
／いっせいま 切れてしまえ／この先 長く生きたとして／わたしには まるで自信がないのです／忍ぶ力が 弱まりはしないか／秘めたこの恋が／露呈してしまうのではないかと （小池昌代『百人一首』）
b ネットレス 切れてもいいのよ このままじゃ／心も
そのうち はじけて消えそう

（橋本治『百人一首がよくわかる』）

c この恋を忍ぶことに いつか耐えられなくなるくらいなら……／私は 今消えてもかまわない

（杉田圭『超訳百人一首うた恋い。』）

教材のリード文には「単なる直訳では歌に込められた思いの深さを表し切れないことがある。（中略）訳者の工夫と、

訳による雰囲気の違いを感じ取ってみよう」という目標が示されており、その目標に沿った活動も末尾に添えられている。これらの訳文は「翻案」と言うべきものであるが、それぞれに特長があり、a・cは現代詩、bは現代短歌になっ

ている。百人一首の現代詩への翻案は夙に大岡信氏（まに）が試みているが、これについて大岡氏は次のように述べている。¹⁶⁾

私は中学生の昔から、国文解釈の勉強をする折などいつも疑問に思う一つのことがあった。それは和歌や俳諧をはじめ、詩的な表現がテキストになっ

てい

る時、その通釈が、一つ一つの語義の解釈に慎重なあまり、通読すると必ずしもすんなりと一息に了解できるようなものになっ

ていない例が少なくないという事実である。文法上の正解が、一篇の詩歌の通釈としては必ずしも魅力満点のものとは限らぬ事例が多いのではないが。(中略)私のこの一種の現代詩訳なるものは、そういう疑問に対する私のささやかな答であると考えていただきたい。(傍線引用者)

大岡氏は「文法上の正解」に飽き足らず、「現代語訳」を「詩」に昇華しようとしたのであるが、このことを氏自身は「百人一首の和歌を『楽譜』とした、現代語による『演奏』」だとしている。示唆に富む発言と言えよう。

また、和歌を現代短歌に置き換えるという翻案について

も、既に俵万智氏が『伊勢物語』で試みている。おなじ月おなじ春ではなくなっておなじ心の我われだけがある(第四段)

俵氏はこのような試みをするに至った背景について次のように述べている。¹⁸⁾

和歌は、散文とはくらべものにならないほど、密度の濃い言葉の集約となっている。それを、わかりやすく読みとき、現代の散文で読みほぐしてゆけば、長くなるのは当然のことではある。／＼が、その結果、もとの歌が持っていた韻律の美しさが失われてしまうことのもったいなさ。(中略)もう少し本来のリズムを、訳に生かせないものだろうか、と思った。リズムだっ

て、作品のうちなのだから。(傍線引用者)

前掲の数研出版の教科書も、これらのような問題を「現代語訳」の比較を通して考えさせようというのであろう。但し、この教科書の場合、学習者は既に自分の目で「原文」を見ているという前提があるということに注意したい。「原文」の学習のその先に翻案の比較という課題が設定されているのである。単に興味を惹くためだけの教材と見るべきではない。

予め自分で作った「逐語訳」があれば比較の基準として効果的に活用できるし、また、縁語を学習していれば、縁語が訳出しにくいことも改めて実感されるはずである(絶

え」「ながらへ」「弱り」は「緒」の縁語)。前稿で強調したことであるが、「逐語訳」が比較や思考の出発点になるということを変更して確認しておきたい。

対象となるものの共通点や相違点を考えるというのは科学的思考の第一歩であり、このような「現代語訳」の比較は思考力を育成する一助となるはずである。もちろん、この場合、必ずしも「正解」に至ることが目的ではない。たとえ「正解」のないものであっても、生徒自身が対象を相対化し、批判的に思考するということが重要なのである。

五、額田王「君待つと」の歌をめぐる

ところで、和歌と俳句(発句)は異なる文芸様式であり、「現代語訳」についても異なる側面を持っている。和歌の場合、俳句ほど言葉を補わなくても大意が把握できるものも多く、既存の「現代語訳」も逐語訳に近いものが多い。訳文が互いに似通っているので、教材としてはより精緻な比較が求められるとも言えるだろう。以下、額田王ぬたのおおきみの歌を例として具体的に考察してみたい。

額田王は天智朝を中心に活躍した女流歌人である。王の歌は全ての中学校教科書(三年)で『万葉集』の定番教材になっているが、本稿では三省堂・教育出版・光村図書ひこむらの三社が採録する次の歌を取り上げる。平易に見えて実は一筋縄ではない側面を持っているからである。

君待つと我が恋こひ居をれば我が屋戸やどのすだれ動かし秋の
風吹く(万葉集・巻四・四八八)

教科書の和歌単元はしばしば「心情」の読み取りを課題として掲げるが、この歌の場合、その「心情」はどのようなのであろうか。上二句によれば男を恋しく思っている歌だということはわかるが(上代では「君」は原則として男を指す)、一首全体としては「人を待つて来ない寂寥感を歌う」(多田一臣『万葉集全解』2008)ものなのか、それとも「すだれの動きにも恋人の訪れかと胸をおどらせることを詠んだ歌」(稲岡耕二『和歌文学大系』1997)なのか。この点については古来議論が分かれており、現在でも決着が付いたとは言いがたいところがある。

ちなみに右に引用した和歌文学大系の校注者、稲岡耕二氏と言えば先年逝去された万葉学の泰斗であるが、その追悼文において渡部泰明氏が次のような興味深いエピソードを紹介している。²⁰⁾

修士論文の口述試験の休憩時間だったかと思う。額田王の「我が屋戸の簾動かし秋の風吹く」を持ち出した稲岡先生が、「あなたをお待ちして恋いこがれていると、我が家の簾を動かして秋風が吹く。まるであなたが訪れたかと思わせるように」と名調子で訳されると、すかさず渡辺先生(渡辺実氏のこと・引用者注)が、「あなたが訪れたかと云々の訳は蛇足やな。歌がだい

なしや」と合いの手を入れると、「いやいやこはそう訳さないといけない」と一步も引かず、それを「そもそも万葉の歌の訳はねえ……」と野口先生（野口元大氏のこと・引用者注）が混ぜ返す（下略）

国文学・国語学の碩学が繰り広げる楽しい雑談に引き込まれるが、一体何を問題にしているのであらうか。光村圖書の教科書によって額田王の歌の現代語訳を掲げよう。

あなたのおいでを待つて私が恋しく思つております、我が家の戸口のすだれを動かして、秋の風が吹いております。

（光村図書『国語3』）

わずかに言葉を補っているが、概ね「逐語訳」の範囲と云つてよい。しかし、稲岡氏がこだわった「まるであなたが訪れたかと思わせるように」という訳に相当する部分はどこにも見当たらない。これは秋風が吹いたことの意味を稲岡氏が解釈して補ったものだからである。

実は「秋の風吹く」の意味するところについても、古来様々な説がある。以下、前掲の『全解』や『和歌文学大系』を除き、その代表的なものを掲げよう。

①もし君やおはしますとおもふ心に、簾をうごかす秋風の音も君かとおもひてはからるゝなり

（契沖『万葉代匠記』初稿本168頁）

②和漢ともに風の使といふことあれば、君をわが恋をれば、心の通ずるにや、秋風の、君が使のやうに簾をう

ごかして吹くるとよみたまへる歌。

（『代匠記』初稿本別案）

③秋風吹は、人を恋しく思ふをり、風の吹来るは、其、

人の来らむとする前兆ぞ、といふ諺のありしをふみて、

よみ給へるなるべし（鹿持雅澄『万葉集古義』768頁）

④簾動之、秋風吹は、ただその場合の景趣を述べただけ

である。（鴻巣盛廣『万葉集全釈』168頁）

⑤早秋の風は親しまれ待たれるものであらうから、此の一首も其の爽快な秋風の先づ訪れるのを感じながら、満足した心で人を待つ趣と解される。来るか来ぬかを待ちなやむ心ではない。

（土屋文明『万葉集私注』208頁）

⑥（漢籍の例を挙げて）語句の類似性から云へば、これらは必ずしも源泉とは云ひ難いが、佳人秋風裡の幽艶な歌風の姿は、六朝詩よりまなんだものとみるべきではなからうか。

（小島憲之）

⑦額田王歌の結句「秋の風吹く」の表現にも、含蓄として身に沁みるような秋風の意とともに、そこに、天皇の訪れを望みえないのではないかという嘆きの気持が漂っているように思われるのである。この額田王歌の「秋風」の用法には、源泉として六朝時代の閨怨詩の「秋風」が考えられ、中国閨怨詩の時代的に最も早い影響をここに指摘することができると思う。（井手至）

①は秋風が簾を揺らしたのを「君」の訪れのように錯覚したとするもの、②は漢籍にも「風の使」というのがあることから秋風を「君」の使者と見るものである。また、③は秋風を訪問の「前兆」とみる当時の諺を踏まえているとするもの（但し文獻的にそのような諺が確認できるわけではない）、④は「秋風」に特に意味はなく単に「景趣」を述べたに過ぎないとするものである。

⑤は「秋の風」を「爽快な」ものと捉えているが、秋風のイメージは恐らく生徒の中でも意見が分かれるのではないだろうか。後述するように現在では「嘆き」を喚起する風と捉える見方が優勢であるが、例えば④のように秋風と待人の来訪とを結びつけない立場であれば、⑤のような見方も成り立ちうるということである。

⑥と⑦は漢籍の影響を積極的に見ようとするものである。額田王の右の歌が漢籍の影響を受けているというのは今日では通説と言つてよいが、それは例えば次のような詩句との類似が指摘されてきたからである。

a 清風^ハ動^{カシ}帷簾^ヲ晨月^ハ照^{ラス}幽房^ヲ。

（張華「情詩」「文選」卷二九、『玉台新詠』卷二）

b 夜相思^ヒ、風吹^キ窓簾動^ク、言^フ是^レ所^ニ歛^キ来^ルカト。

〔清商曲辞〕〔吳声歌、華山畿〕—〔樂府詩集〕卷四六）

c 簾動^{ケバ}憶^ヒ君^ヲ来^ルカト、雷^ノ声^{スレバ}似^シ車^ノ度^ルニ。

（費昶「有所思」「玉台新詠」卷六「鼓吹曲」）

a は土居光知氏²⁴、b は小島憲之氏²⁵、c は中西進氏や古沢未知男氏²⁷の指摘した例であるが、いずれも秋風が「簾」を動かすという情景が描かれ、b・c は、そこから恋人の来訪を思うという内容になっている²⁸。

なお、井手氏はこれらの漢籍について「簾の動きに君の来訪かと疑うものはあっても、風を待ち人の来訪の前兆ととらえたものはない。したがって、これらの詩はいずれも、空しく風が吹き、恋しい人に逢えない嘆きを詠んだ内容となっている」と指摘する。その上で「女人が『秋風』の吹く閨房にあつて物思いに沈み、夫に逢えないことを嘆いた六朝宮廷詩」の例を複数挙げて、右の額田王歌はこのような「中国閨怨詩」の影響を受けているとするのである²⁹。身崎壽氏もこの説を受け、「『秋の風』によって志向されるこの一首の発想の核心は、井手論文の題に端的にしめされているように『独り寝の嘆き』にあつたとみるのが妥当ではないだろうか」（傍点原文）と述べている³⁰。

『万葉集』はこの額田王の歌の直後に「風をだに恋ふるは羨し風をだに來むとし待たば何か嘆かむ」（鏡女王、卷四・四八九）という歌を載録するが、この歌は額田王の歌を踏まえて自分の「嘆き」を詠むものと考えられるので、その点から見ても額田王の歌が「嘆き」を基調としていることは否定できないだろう。

しかし、額田王の歌が閨怨詩の発想を踏まえているとし

でも、「嘆き」だけを詠んだ歌と単純化することはできないのではないだろうか。夙に窪田空穂『万葉集評釈』は、「一瞬間の昂奮と失望との交錯した、捉へやすきに似て、実は捉へては云ひ難い気分である」と評しているが、秋風に簾が翻るのを「君」の訪れかと思う、その瞬間の喜びはやはり表現されていると見るべきであろう。それが「秋風」であることに気付き、はかない嘆きへと変わる——その一瞬の心情の変化がこの歌の抒情を支えているのである。

この歌をよく見ると、第三句「すだれ動かし」までは、その動作主体は提示されていない。この歌の享受者（読者あるいは聴き手）は、結句「秋の風吹く」に至って初めて簾を動かしたのが「秋風」だと気づくことになる。第四句まででは、何が簾を動かしたのかはわからないのだから、「君」が来たのかもしれない、という一瞬の喜びをここに読み取るとはむしろ自然なことであろう。ここには「君待つと我が恋ひ居れば」↓「我が屋戸のすだれ動かし」↓「秋の風吹く」という時間の流れが表現されているのであって、その時間の展開に従って心情も変化しているということなのである。この歌の享受者は結句に至るまで歌の進行に伴って心情の移ろいを追体験することになる。その心情の移ろいこそが、この歌の核心ではないだろうか。

以上、研究史を概観した上で私見を示したが、本稿の目指すところは韻文の教材化という問題について考えること

にある。言うまでもなく、右の知見をそのまま中学三年生に教えようというのではない。「秋の風吹く」という情景からどのような心情が読み取れるのか（あるいは読み取れないのか）。それを「現代語訳」の比較によって考えてみようというのである。以下、「現代語訳」の例を掲げよう（説明の便宜上、相違する部分に傍線を付した）。

a あなたをお待ちして恋いこがれていると、我が家の簾を動かして秋風が吹く。まるであなたが訪れたかと思わせるように。
（渡部氏所引の稲岡氏説・再掲）

b 今にもあの御方がおいでになるか、と待ちこがれて居ると、人の来るさきぶれの様に、秋の風許りが、自分の家の簾を動して吹きこんで来た。
（折口信夫『口訳万葉集』1916）

c 君のお出を待つて心にお慕ひ申上げて居ると、偶々秋風が吹いて来て、それかとはかり簾を吹き動かしたことである。
（次田潤『万葉集新講』1921）

d 貴方のお越しになるのを待つて、私が恋い慕つて居りますと、私の家の簾を動かして秋風が吹きます。

e わたしはあの人を待つ／恋い慕いながら待つ／あつ、簾が動いた！／でも、それは——／ただの秋風……
（上野誠）

改めて稲岡氏の「現代語訳」（a）を見ると、傍線部は

契沖の①説に依拠していることがわかる。前述のごとく、稲岡氏による注釈書（『和歌文学大系』）では、語句に即して逐語訳を示した上で、「すだれの動きにも恋人の訪れかと胸をおどらせることを詠んだ歌。風の吹くのは思う人の来る前兆という説もあるが、そうではなく歌の言葉のままに理解すべきだろう」（一部再掲）と注を付けている。期待感の方に重きを置いた解釈と言えよう。

bの折口信夫説は「ささぶれ」（前触れ・前兆）とあるので③の『古義』説に基づくことが明らかである。一方、次田潤『新講』（c）の「それかとばかり」というのはわかりにくい、「それ」というのは「君のお出」を指していると考えられるので、契沖①説に拠っていると見てよい。

なお、dの『総釈』は逐語訳に近いが、前稿で述べたように、古典の注釈は「語釈」と「現代語訳」を分離させることによって「現代語訳」に解釈を盛り込む必要性が減じたために、次第に逐語訳を志向するようになっていく。特に戦後の注釈書の「現代語訳」は逐語訳に近いものばかりとなってしまうので、教材のための訳文は語釈や評釈を参照して教師が新たに作成するということも考えられよう。

eの上野氏の訳は感嘆符（「！」）を用いて「簾が動いた」瞬間をクローズアップし、「でも」という逆接で、落胆へと変わる心情の変化を表現している。改行（／部分）も効果的である。翻案という形を探ることで逐語訳では伝わり

にくい心情の移ろいを巧みに再現していると言える。

以上、中学校教科書に載る額田王の歌について「現代語訳」の比較ということを試みた。無論「正解」を選ぶことは必ずしもこの課題の目的ではない。相違点を比較することによって「秋風」が表現されることの意味を生徒が自分なりに考え、批判的に思考することが大切なのである。

注意すべきは、このような比較をするためには生徒自身が丁寧に「原文」を読まなければならないということである。それぞれの「現代語訳」がどこにどのような言葉を補っているのか、「原文」と対照させて逐語的に確認する必要があるからである。そのプロセスこそは言葉に即した思考力育成の出発点となるのではなからうか。

六、おわりに

このように、和歌や俳句の「現代語訳」を丁寧に検証することは生徒が「原文」に目を向ける契機となりうる。特に中学三年から高校一年までの過渡的な時期において、和歌や俳句は「原文」中心の授業に移行するための教材として有効なものと言えよう。

なお、読解が表面的なものに終わらないためには、既存の「現代語訳」を用いるにしても、それを動かし難いもの（＝「静態」として扱うのではなく、もっと流動的なもの（＝「動態」として扱い、生徒自身が主体的に「現代語訳」に関

わかっていく状況を作る必要がある⁴⁰。生徒が自力で訳出できない段階であれば、まずは原文と既存の「現代語訳」を対照させるところからスタートしてはどうかというものが本稿の視点である。読解が放恣な想像に拡散しないためにも、「現代語訳」をただ読み飛ばすのではなく、時に立ち止まって「原文」と一語レベルで対照させるというプロセスが不可欠なのである。

そして、可能な場合には諸説の比較という視点を少しでも採り入れたい。作品を選べば比較を通して思考力の育成に資することができるからである。本稿では、中学校三年の教科書を対象に、複数の説がわかりやすく対立している作品を取り上げたが、このようなケースでは、諸説を比較することがその作品の表現を深く読み込むことにつながっていく。注釈を踏まえて古典を読み、諸説を比較するというのは文学研究の基本であるが、その手法は中等教育へも十分に応用できるのではないだろうか。

注

(1) 和歌の「現代語訳」については拙稿参照（「和歌の『現代語訳』をめぐる――学校教育を視野に――」『文学・語学』第二三九号、二〇二二・一二）。なお、本稿はこの論文の続編であり、論述に一部重なりがあることを予めお断りする。

(2) 例えば入門段階では別提型の「現代語訳」によって先に

概要を把握してから原文に入ることとできる。

(3) 参照、宇和川匠助『草の戸も』の解釈諸説の批判と紀行本文と句との関係について『連歌俳諧研究』第一五号、一九五七・一二。なお、この論文は『高知大学学術研究報告』第六巻第一五号にも掲載されており、[web](#)で閲覧できる。

(4) 本文は岩波文庫による（萩原恭男校注『芭蕉おくのほそ道 付曾良旅日記 奥細道荻菰抄』一九七九・一、一六五頁）。

(5) 荻野清氏の指摘による（『芭蕉論考』一九四九・四、九三頁以下）。

(6) 岡田利兵衛氏の指摘による（「奥の細道で残された芭蕉の真蹟」『国文学解釈と鑑賞』第二二巻第三号、一九五七・三）。

(7) 『世中百韻』及び真蹟短冊の本文は新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集①』（一九九五・七、二五〇頁）による。

(8) 参照、宇和川注3論文。
二〇〇三・八、二七～二八頁。

(9) 参照、堀切実編『おくのほそ道』解釈事典―諸説一覧―
二〇〇三・八、二七～二八頁。

(10) a（東京書籍）は『新版おくのほそ道』（角川ソフィア文庫2003）に、b（光村図書）は新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』（小学館1997）にそれぞれ基づく。なお、前文の本文も微妙に異なる（aは「住める方は人に譲り」、bは「住めるかたは人に譲りて」となっている）。

(11) その場合「表八句」はこの「庵の柱」に懸け置いたのかという疑問も生じるが、「採茶庵の柱」とすることで合理

的に解する見方もある(『大系』『旧全集』)。

(12) 本文は新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集②』(一九九七・九、二四七頁)による。

(13) 富山奏「芭蕉の発句『草の戸も住替る代ぞひなの家』考」『異端の俳諧師芭蕉の芸境』一九九一、初出一九七九・三、二〇四頁以下。なお、この議論については宇和川注3論文も参照。

(14) 古典の「現代語訳」に唯一絶対の「正解」があると思ひ込んでしまえば、その「正解」にたどり着けない自分は古典が苦手だと考えても不思議はない。そのような誤解を与えないよう留意することは、とりわけ入門期の指導においては重要だと考える。

(15) 島内景二「古典を生きて未来に伝えるために」『国語と国文学』第九九巻第一〇号、二〇二二・一〇。なお、同論文の中で島内氏は「もっと『注釈』を活用して、時代と共に解釈が変容していった古典の生命力を、高校生に教える必要がある」とも述べている。

(16) 大岡信「百人一首」講談社文庫、一九八〇・一一、五頁。以下、大岡氏の発言はこの書による。なお、当該書の訳文は『グラフィック版百人一首』日本の古典別巻1(一九七五)を初出とする。

(17) 北杜夫・俵万智『竹取物語・伊勢物語』21世紀版少年少女古典文学館二〇〇九、初出一九九一・一〇、一二二頁。

(18) 俵万智「短歌を訳す―言葉の壁を越えて」『言葉の虫めがね』一九九九・四、八四頁。なお、この引用部分は「古典の和歌を現代の言葉で書き換える」と題して第一学習社の各種「言語文化」教科書(言文713~716)に記載されている。

(19) 注1拙稿参照

(20) 参照、岡部政裕「秋の風吹く」をめぐって」『国語と国文学』第五七巻第一号、一九八〇・一。

(21) 渡部泰明「上智大学での稲岡先生」『国語と国文学』第九巻第四号、二〇二二・四。

(22) 小島憲之「上代日本文学与中国文学」中、一九六四・三、八九六頁。

(23) 井手至「秋風の嘆き」『遊文録 万葉篇一』一九九三、初出一九八八・一二、二六四頁。なお、この論文の初出稿は www.waseda.ac.jp で閲覧できる(大阪市立大学「文学史研究」第二九号)。

(24) 土居光知「比較文学と『万葉集』」『古代伝説と文学』一九六〇、初出一九五四・一〇、三六頁。なお、訓点は『新釈漢文大系』による(cも同じ)。

(25) 小島注22書、八九六頁。訓点引用者。「所歛」は恋人のこと。「夜なかにあなたのことを思っていると、風が吹いてきて窓のすだれが動いた。はっとして、恋しいあなたがいらしたのかと思いました」(松枝茂夫編『中国名詩選』中、一九八四・九、一八〇頁)の意。なお、『佩文韻府』(所歛の項)所引「古楽府」には「風吹窓簾動、疑是所歛来」とある。

(26) 中西進「額田王論」『中西進万葉論集』第一巻、一九九五、初出一九六一・二、一五四頁。

(27) 古沢未知男「簾動之秋風吹」と張茂先「情詩」『漢詩文引用より見た万葉集の研究』一九六六・七、一六八頁以下。

(28) その他の例は注22～27の諸論を参照。

(29) 井手注23書、二六〇頁以下。氏は「金風響「洞房」、佳人心自傷(金風は洞房に響き、佳人心自^{いた}ら傷む)」(陳吳思玄「闈怨」『古詩類苑』卷九七)など六例を挙げる。なお、用例中の「金風」は秋風のこと。

(30) 身崎壽「額田王万葉歌人の誕生」一九九八・九、一一二頁。

(31) 平館英子氏も「窪田評釈」を引いて同様のことを述べている(「額田王論」『セミナー万葉の歌人と作品』第一巻、一九九九・五、三六頁)。

(32) 額田王の歌には実際に歌われたと見られるものもある(参照、犬養孝「秋山われは―心情表現の構造を中心に―」『万葉の風土』一九五六、初出一九五〇・一一)。作品にもよるが、古代の歌の場合、記録される前段階において声に出して歌われたという可能性は常に考慮しておく必要がある。

(33) 但し、論の性質上、本稿で触れたのは研究史のほんの一部である。詳細は以下の諸論を参照。身崎注30書、多田一臣「額田王論」『額田王―万葉論集―』二〇〇一・五、梶川信行「創られた万葉の歌人 額田王」二〇〇〇・六、同氏「額田王―熟田津に船乗りせむと―」二〇〇九・一一。

(34) 「君」は「あなた」(二人称)、「あの方」(三人称)どちらにも用いるので今はその違いは問題としない。

(35) 上野誠「小さな恋の万葉集」二〇〇五・一二、六〇頁。

(36) 次田「新講」の語釈を見ると、前兆とみる説を否定した上で「待人の来たのではないかと惑はされる意味に見てよい」(三〇九頁)と立場を明確にしている。

(37) 「総釈」は、「代匠記」①や「古義」③の説を否定して「これはただわが恋ひ居る時に、わが屋戸の簾を動かして吹く秋風に心ひかれて詠みあげたもので、一首の声調の中に、無量の感慨が托されてゐる」と述べている。

(38) 注1拙稿参照

(39) 中高双方で扱えば更に効果的だが、どちらか一方でもその効果は十分期待できる。

(40) 「動態としての現代語訳」という考え方については注1拙稿も参看願いたい。

〔付記〕本稿は科学研究費補助金(21K02173)による研究成果の一部である。

(本学研究所・学部 教員)